天戸森遺跡出土品

１　種　　別　　有形文化財（考古資料）
２　名称及び員数　　天戸森遺跡出土品　705点
（内訳）土器92点、土製品78点、石器481点、石製品54点
３　所　在　地　　鹿角市十和田大湯字万座13番地
鹿角市出土文化財管理センター（701点）
秋田市金足鳥崎字後山52番地
秋田県立博物館（４点）
４　所　有　者　　鹿角市
５　時　　代　　縄文時代中期後半
６　出　土　地　　鹿角市花輪字陣場142番地ほか　天戸森遺跡
７　説　　明

天戸森遺跡は、鹿角市花輪に所在する縄文時代中期後半（約4,500～4,000年前）の集落跡である。昭和57年(1982)に鹿角市教育委員会、平成５年(1993)に秋田県教育委員会によって発掘調査が行われ、遺跡の全容がほぼ明らかになっている。約500年の間に繰り返し建て替えられた竪穴住居跡が156軒見つかり、長期間継続した拠点的な集落の跡であることがわかっている。

天戸森遺跡から出土した遺物のうち、全体の形状が明確なものを中心に抽出した。土器は深鉢形土器を主体とし、鉢形土器、注口土器などで構成され、当該期の代表的な器種を網羅している。石器は石鏃（せきぞく）、石錘（せきすい）などの狩猟具や漁撈具、磨石（すりいし）、石皿（いしざら）のような加工具が揃っている。土製品、石製品には耳飾りなどの装身具や石棒（せきぼう）などの祭祀具がある。これら各種の道具類は、集落における生活や生業の実態にせまることができる好資料である。中でも、斧状土製品や十字形の土偶、有脚の石皿、大形石棒は、当該期にみられる特徴的な遺物群である。

また、縄文土器は形や文様に変化が出やすいため、時期別、地域別にグループとして捉えることで、相対的な時間のものさしを作ることができる。このものさしは縄文時代研究の基盤となる重要な指標である。縄文時代中期の東北地方では概ね北緯40度を境にして、北に円筒土器、南に大木式土器が分布している。しかし、中期後半になると次第に円筒土器は作られなくなり、代わりに北の地域でも、大木式土器もしくはその影響を受けた土器が作られるようになる。天戸森遺跡出土の土器群は、円筒土器の終わりから大木式土器へ移り変わる約500年間の変化を一遺跡の出土土器群のみでうかがうことができる。

本出土品は、縄文時代中期後半の米代川上流域における遺物群の様相を知ることができる上に、集落における生活や生業の実態を示す良好な資料群である。また、約500年間の土器の変遷がわかることから貴重である。

参　　考

鹿角市指定有形文化財（考古資料）「天戸森遺跡出土土器　４点」　平成10年(1998)４月15日指定

参考文献

鹿角市教育委員会　『天戸森遺跡発掘調査報告書』鹿角市文化財調査資料26　昭和59年(1984) 3月

鹿角市教育委員会　『天戸森の土器－天戸森遺跡出土縄文土器図録－』鹿角市文化財調査資料41　平成２年(1990) 3月

秋田県教育委員会　『県道田山・花輪線関係遺跡発掘調査報告書Ⅱ－天戸森遺跡－』秋田県文化財調査報告書第248集　平成６年(1994) 3月